

愛され上手は程遠い!?

Yuka & Hayato

雪兎ざっく

Zakku Yukito



エタニティ文庫

目次

愛され上手は程遠い!?

5

第一章 自意識過剰

6

第二章 熱愛過剰

175

書き下ろし番外編
愛され上手になりたい

335

愛され上手は程遠い!?

第一章 自意識過剰

プロローグ

私——田中夕夏は、男の人が大の苦手だ。

異性であることを意識するあまり、いつも変な態度を取ってしまうから。そんな私の態度は当然、相手の気分を害するし、その結果何度となく『自意識過剰な女』と思われるてきた。

誰も私になんて興味ないと、頭ではわかっている。でも、周りの目を気にしすぎてしまっ癖が抜けず、二十四年間誰ともお付き合いしたことがないまま。さすがに最近では、焦る気持ちもあるけれど、どうすることもできず日々を過ごしている。

——私が自意識過剰だと最初に自覚したのは、小学五年生の時だった。

当時はそんな難しい言葉は知らなかったけれど、もしかしたら自分は、恥ずかしい勘

違いをしたのかも、と気づいたのだ。

それは、家が近所で、一緒に登下校していた男の子との悲しい思い出。

女友達を含めても、彼とは一番仲良しだった。ゲームなどの趣味も合って、いつも一緒にいたように思う。

おませな周りの友達からは、『付き合っちゃえば!』とひやかされたものの、彼のことが大好きだったから否定しなかった。

……今思えば私は、同い年の子たちと比べて、考え方が少し幼かったのかもしれない。好きな人を他人に知られることを恥ずかしいと思わなかったし、隠そうともしていなかった。本当に彼と「こいびと」になれるかも、と秘かに胸を高鳴らせていたくらいである。

しかし、現実はそう甘くなかった。

私が彼のことを好きだと知った男の子たちが、私たちをからかい始めたのだ。すると、好きだった男の子の態度が一変し——

『ふざけんな、ブス！俺のことが好きなんて、気持ち悪いこと言うなよ！お前なんて、最初から大嫌いだ』

そう言ってもう二度と笑いかけられることはなかった。

次にまた、同じようなショックな経験をしたのは中学生の時。

入学したばかりの頃、放課後に友達と連れ立って、どの部活に入ろうかとグラウンドや体育館を回っていた時だった。

『うわ、すげえ可愛い子がいる！ 超好み！』っていう声がすぐ近くで聞こえた。見るとそこには数人の、先輩と思しき男の人の姿。そして今、声を上げたであろう人が私に笑顔を向けてきた。

さらに彼は私に近付いてきて、こう続ける。

『ねえねえ、うちの部のマネージャーしてくれない？』

その人は柔道部に所属していると自己紹介した。先輩はすごく堂々としていて、女子に声をかける時にもまったく恥ずかしくたりしない。周りの友達に冷やかされても『羨ましいんだろー』と撥ねのけた。小学生の頃、思春期特有の異性を意識する心境があまり理解できていなかった私。そのせいで好きな男の子に嫌われてしまった経験があったため、先輩の態度はすごく大人でかつこよく見えた。

——わざわざ自分に声を掛けてくれるなんて嬉しい！

ドキドキして、舞い上がって、一緒に見学していた友達の朱里と、すぐさま入部を決めた。

毎日の洗濯に飲み物等の買い出し、部員たちのストレッチの手伝いなど、柔道部のマ

ネージャーは重労働だった。

だけど、『重いものの買い出しは俺と一緒に行くから言えよ』と言って先輩が手伝ってくれたから頑張れたのだ。それに、買い出しの帰り道、二人だけでアイスクリームを食べたりもして楽しかったから。……デートみたいだと、思っていた。

そんな風にして、いい雰囲気で過ごしていたある日。

『夕夏、毎日ありがとな』

ふいに先輩が、私を呼び捨てにした。今まではずっと名字で呼ばれていたから驚いて、『いえっ……』とかなんとか、よくわからない反応をしてみよう始末。

けれど先輩は、戸惑う私になにも言わなかった。そして、以降は名前呼びが定着した。もう一人のマネージャーである朱里のことは『生田』と名字で呼んでいたし、知る限りでは先輩が女の子を呼び捨てにするのは私だけだったと思う。

それに、遅くして大きな手で、いつも私の頭を撫でてくれた。

缶ジュースを飲んでると先輩が現れて、私が飲んでいた缶にそのまま口をつけるようなこともあった。ジュースを飲むたびに上下する先輩の喉仏を見てると、彼が男の人だということを急激に意識してしまって心臓が破裂しそうだったのも、よく覚えている。そんな私を見て先輩が、『間接キスだな。でも、お前と俺なら、いいよな？』と言ってニヤリとしたことも。

——先輩は、私のことを特別に想ってくれているのかな？

そんな淡い期待を抱いていた。

早く想いを伝えて、恋人になりたい。最初はそう思ったけれど、告白するのは先輩が部活を引退してからにしようと考え直した。

もし付き合えたとして、他の部員に気を使わせるのは悪いし、意識しすぎて自分が変な態度を取ってしまいそうだと思った。それに、先輩から告白してもらえたら、飛び上がるほど嬉しいとも……

そして私たちの関係は、ただの先輩後輩から変わることはなく、ついに先輩の引退の時が来た。

引退試合のあと、誰もいなくなった道場。先輩に残ってもらえるよう頼んでおいた私は、勇気を振り絞って『好きです。付き合ってください』と伝えた。

すると……

『あゝ、悪い。俺、彼女いんだよ』

眉間みまにしわを寄せて迷惑そうに言う先輩。

ポカンとする私に、彼はさらに深いため息を吐く。

『なんでこのタイミングで告白なんかすんだよ。断った手前、これから俺が部活に顔出しにくくなんだろ。……ったく、めんどくせえ』

本当にこれは先輩がしゃべっている言葉かと、耳を疑いながら彼の口元を見つめた。

——あんなに優しかったのに。あんなに、「特別」を感じていたのに。

そのすべてが私の思い違いだったことがショックで、あからさまに嫌そうな態度を取られたことが悲しくて。なにも言葉を発することができなかった。

『うざい』

そう言い捨てて彼は立ち去り、卒業までほとんど部活に顔を見せることはなかった。

柔道部の同級生が『先輩、なんで来てくれないんだろ。稽古けいこつけてほしいな』と寂しそうに言う声に、胸が痛んだ。

……私のせいで、ごめん。

他のOBが来てくれるたびに、先輩がいけないことが申し訳なくて、涙をこらえていた。

先輩との一件が応えた私は、高校生になる頃にはかなり警戒心を強めていた。

自分の思い込みの激しさを自覚し、男子と仲良くならないと決めたのである。

仲良くなつて、好きになって、また同じことになったら……って思うと、怖くて。できる限り、話したくないし、関わりたくなかった。

挨拶あいさつされても目を合わせせることもできずに、返事をするのも俯うつむいたまま。男女ペアで

行うおこなような日直さえ、無言で自分の仕事を終わらせてさっさと帰った。

そんな態度だったから、男子からは好かれてなかったと思う。でも、それでいい。そう思ってた。

そして迎えた二年生の体育祭。

二年生はフォークダンスが演目にあつた。一年以上男子を避け続けた結果、男子への免疫がまったくなくなつた私。練習で手をつないでただけで、顔がカーッと熱くなるのがわかつた。

授業をサボるわけにはいかず、頑張つて練習を続け、当日も無事に終えることができた。しかし、体育祭当日、またしてもショックな言葉を聞いてしまったのだ。

ようやくダンスが終わり、一人ホツとして木陰で休んでいる時に聞こえてきた、クラス男子たちの笑い声。

『ダンスで手をつなぐたび、真っ赤になんの！』

瞬時に自分のことを言っているのだとわかつた。

気がつかれないように小さく体を丸めて息をひそめた。

『あいつさ、自意識過剰だよな〜。いっつも男子を警戒しまくってるけど、なに？ 手え出されるとでも思ってるのかよ』

『勘違いしてんじゃねーよ』

ぎやはははっ。

大きな笑い声を上げながら、すぐ近くを通り過ぎていく男子たち。

恥ずかしくて恥ずかしくて、消えてしまいたい衝動に駆られる。その後しばらく、顔を覆つてその場でうずくまることしかできなかった。

その後は、高校卒業と同時に、それまでの友達みんなと連絡を絶ち、逃げるように大学へ進学した。

自意識過剰と思われていた自分を知る人がいない場所で、静かに暮らしていきたい。その一心だった。

男の人と関わつて、『勘違い』『自意識過剰』——そんな風に思われるのが怖い。

もう誰かを好きになつて傷ついたり、相手も私を好きかもしれないなんて舞い上がつたりしたくない。私は心に嚴重に鍵をかけて、生涯一人で生きていこうと誓つたのだつた。

1

時は流れて五年後。

私は、工事用車両や建築機械のレンタル会社に就職した。パワーショベル、掘削機械、発電機、コンプレッサー、高所作業車などなどの大型機械を扱う会社だ。そこで営業事

務の仕事をしている。

仕事にも慣れてきた社会人二年目のある日、大学時代の同級生・祐子と電話をしていた。祐子と出会ったのは、大学に入ってしまった頃。とある講義の教室で出会った。

『あなた、田中夕夏っていう名前なの？ 私は「田中祐子」。私たちって、名前が似てるね！』

確か最初は、そんな風に話しかけてくれたはず。

祐子は社交的で友人が多く、かなり分厚い自分の殻に閉じこもっていた私にも気さくに話しかけてくれた。私たちは、すぐに仲良くなった。

当時の私は、人目を過度に怖がっていたため、祐子が遊びに誘ってくれても、ほとんど応じなかったと思う。それでも彼女は嫌な顔をせず、私のペースに合わせて付き合いを続けてくれた。

大学を卒業して一年以上経った今でも連絡を取り合う、唯一の友人だ。

その祐子が、結婚することになった。前々から話は聞いていたけれど、今日正式にプロポーズを受けたそうだった。

そんな彼女が、喜びの報告とともに、こんな提案をしてきた。

『私の独身最後の思い出に食事会しよ！ ちょっといいところ、予約したの！』

そう言われて、断る理由はない。むしろこういう場合は、私から誘うべきだったのに、

なんて気がきかないのだ。自分がかっかりしながらも快諾し、当日着る服とか、結婚祝いのプレゼントとかを準備して、すごく楽しみにしていた。

しかし数日後、ふたたび祐子から電話があつて――

『今度の食事会の時、夕夏に紹介したい男性がいるの。康司の友達なんだけど、二人とも連れてきていい？』

――その言葉で、状況が一変した。

康司さん、というのは祐子の旦那さんになる方で、私も何度か会ったことがある。

ととっても、祐子と遊ぶ時に彼が送迎役を買って出ってくれて、少し車に乗せてもらった程度だけだ。しかも、会話したことはほとんどない。

康司さんが同席するっただけでも、ハードルが高い。

「無理だつてば！ そんな食事会になるなら、行かない！」

思い切り拒否してしまった。でも、知らない男性と食事なんて冗談じゃない。

『結婚のお祝い、してくれるんじゃないの？』

悲しそうな祐子の声を聞いても譲れない。

「するよ！ したいよ！ けど、私と祐子の二人きりか、もしくは旦那さんを含めた三人じゃなきゃ無理！」

これでも、相当な譲歩だ。せっかくのお祝いのごことで拒否して悪いけど、本当に無理だから！

それにしても、祐子がこんな風に私に男の人を紹介しようとするなんて初めてだ。私が男性を苦手とわかっている彼女が頼んでくるなんて、なにか事情でもあるのだろうか。

『すごくステキな人だよ！ おすすめなの！』

『おすすめされても、無理なものは無理なの』

『お願い！ 会ってみるだけ。向こうも、お祝いしてくれるって言うてるから、せっかくなら一緒にと思って』

「別で一席設けてもらったらいいじゃない。その人だって、男性が苦手で不審な行動を取っちゃうかもしれない私が一緒じゃないほうが楽しいよ！」

『……ねえ、夕夏。いつまで自分の殻に閉じこもってるつもりなの？ 夕夏は可愛いし、いい子だから、もっと自分に自信を持ちなさい。食事は、そのきっかけだと思って』

「祐子……」

感動だ。そんな風に私のことを考えてくれていたなんて嬉しい。でも勇気が出ない。そう考えていたら――

『つまりはアレよ。私の自慢の友達を見せびらかしたいのー！』

……私は見世物パンダか！

祐子は最後、照れ隠しのように言っていたけれど、彼女が心配してくれているのが伝わってきた。

だから私も、一步踏み出すことを決意したのだ。

四人で食事をする。ただし、紹介とか、そういうのではなく、あくまでも普通に食事するだけ、と約束して電話を切った。

その後、ベッドに寝そべってあれこれ考える。紹介目的ではなくなったとはいえ、緊張することには変わらない。

――当日、どんな格好をしよう？ お洒落しすぎて、自意識過剰って思われたらどうしよう。ああ、でも、この日のために、すでにお高いワンピースを買ってしまった。ドレスコードのある高級店だから、普段着で行くわけにはいかない。それに、こんな、気合いの入ったワンピース、そうそう着る機会なんてない。

加えて、五桁もする金額の服を着ないままタンスの肥やしにするなんて、もったいなさすぎる。

さらに、他に着ていける服が手持ちにあるわけでもない。

ワンピースに合わせて選んだアクセサリーと……靴と……靴と……靴と……。使わないまましまっておくのは悲しすぎる。

その夜は、熱が出るんじゃないかというほど悩み、ようやく眠りについたのは明け方

だった。



約束の食事会当日の金曜日。

私たちはお店の前で待ち合わせた。

到着した時には祐子だけがいて、いきなり男性がいなことにホッとした。

祐子は私を見た途端、両手を広げて歓声を上げる。

「夕夏！　すごい可愛い！」

——悩みに悩んだ末、結局、予定通りの服装で来た。

祐子が驚くのも無理はない。本当に普段はしないようなお洒落しゃれをしてきたのだ。

淡いピンク色のワンピースと、それに合わせて買ったネックレス。肩まである真っ直ぐな黒髪は、下ろしたままにした。そのほうが、ピンクのワンピースの甘さをほどよく抑えられる気がして。こういう色を普段着ないから、気恥きはずかしさもあったのだ。足元は、足首に花のポイントがついたストッキングに、ふちにレースがあしらわれたパンプスを履はいている。

「ありがとう。そして、おめでとう」

まずはお祝いの言葉とともに、プレゼントを渡した。

「ありがとう」

幸せそうに笑う彼女は、文句なしに可愛い。優しくて社交性がある上に美人なんて、

鬼に金棒じゃないか。康司さんが羨うらやましい。

「そういえば、康司さんは？　一緒じゃないの？」

「友達と来るって言って……………、あ、来た！」

その言葉に、ビクンと体が震ふるえてしまった。

——ああ、胃が痛い。

落ち着け、落ち着け、意識する必要はない。

祐子が手を振る先に視線をやると、背の高い二人組の男性がこっちに向かってきていた。

二人とも細身のスーツに身を包んでいる。すらりと背が高くお洒落しゃれだ。

遠目にも格好いいのがわかる。

「お待たせ」

間近で見ると、どこのファッション雑誌から抜け出てきたようだった。

少し垂れ目た気味の優しい顔立ちのほうが、祐子の婚約者の岸谷康司さん。

もう一人は、康司さんよりもっと背が高くて、逞たくましい体つきだ。サイドの毛は無造

作にうしろに流し、前髪は軽く上げている。おでこが出ているからか、肌の綺麗さが強調されているなあとと思う。少し太めの眉毛と切れ長の目、薄い唇が絶妙に配置されていて、思わずうっとりするほどの整った顔をしていた。

康司さんは「こんばんは」とにこやかに挨拶をするけれど、もう一人は気に入らなそうにこつちを見ているだけだ。

そんな不機嫌な顔さえ絵になる姿を見て——なぜか、すんと肩の力が抜けた。

——あれ？ 私、男の人を前にしても全然緊張していない。

カーツと顔が熱くなったり、緊張から体が強張っているような様子も皆無だ。

不思議に思いながらも導き出した答えは……格好よさが異次元すぎて、緊張する必要もない、と私の頭が判断したんじゃないかってこと。

こんな素敵な男性が、私の人生に関わることなんて絶対ない。そう断言できるから、身構える必要もないと思えた。

——ああ、逆にラクチンだ。

そっかあ。こういう人なら、逆に緊張しないのね。

新発見だ。なんだかすごく楽しくなって、ふふっと笑い声を上げてしまう。

すると、康司さんたちがびっくりしたようにこつちを見たので、失礼なことをしてしまったと気づき、慌てて頭を下げた。

「初めまして。祐子の友人の、田中夕夏です」

場を取り繕うように、康司さんの友達に向かって自己紹介する。ちゃんと目を見て、きちんと挨拶できた。私にしては、奇跡的な出来事だ。

「あー、岩泉隼です。よろしく」

彼は素っ気なくそう言い、ふいと顔を逸らしてしまふ。

私は、イケメンは声までイケメンなのね、と場違いなことを考えながら、連れ立って店に入っていった。

岩泉さんは、最初の不機嫌そうな印象とは一転、席につくと軽く微笑んでくれた。

コース料理をあらかじめ頼んでいたため、ドリンクメニューだけを渡される。しかし、横文字ばかりでわからない！戸惑っていると、隣からひよいと手が伸びてきた。

「アルコールは呑める？甘めと辛め、どっちが好み？」

岩泉さんは私の好みを聞いて、スマートに注文してくれた。

高級店に慣れていて、女性の扱いにも長けているんだなあと感心すると同時に、ますます自分とは縁のない相手だと確信し、さらにリラククスできる。

和やかに、思った以上に楽しく食事は進んだ。

その中で祐子と康司さんのなれそめを聞いていると、なんと、新事実がたくさん出て

きた。

「え？ 祐子ってば玉の輿に乗ったの!？」

いつもよりも多めにワインを呑んでいた私は、ふわふわしながら尋ねた。康司さんの前で、そんなあけすけなことを言うのはよくないと思いつつも、口が勝手に動いてしまう。

「玉の輿？ そうと言え、そーだねえ。康司の家は、由緒正しい立派なお家だからねえ」

祐子も酔っているようで、同じようにふわふわした口調の答えが返ってきた。

なんと、祐子ってば、勤めている会社の社長令息を射止めたらしい。

彼女の勤め先は大手総合商社で、康司さんは二十八歳という若さながら将来の社長との呼び声も高い社長令息だという。ロマンス小説みたいな展開だ。

ちなみに康司さんと岩泉さんは同じ会社に勤めており、年齢も同じ幼馴染らしい。

しかも、岩泉さんのお父さんは、その商社の九州支社の支社長さんだという。

支社長って言ったって、大手総合商社の支社をまとめているのだ。彼だって、充分御曹司と言える。康司さんとは親同士が友人だったこともあり、小さな頃からよく遊んでいたそう。将来は康司さんの右腕となるべく勉強中だという。岩泉さんは謙遜して

いけれど、祐子が言うには彼も、確実に副社長の座に就くだろうと、社内で評判らしい。私には幼い時からずっと一緒に友達なんていないから羨ましい。そして、目標に向

かって勉強しているなんて、とても格好いいと思う。

思ったことを素直に伝えたら、岩泉さんは照れくさそうに笑った。

家柄がよく、将来も有望で、女性の扱いにも長けていて、背が高くイケメン。――

なんてハイスベック。

祐子が、こんなお方を私の交際相手として紹介しようとしたなんて笑ってしまう。私なんて相手にされるはずもない。どんな女性でも選び放題の人だ。

岩泉さんのことを知れば知るほど警戒心が解けていき、いつも通りに振る舞えた。

あまりにリラックスしすぎて、男性二人はそっちのけでガールズトークに花を咲かせた。――

「そっかあ。そういうところへお嫁に行ったら、家のしきたりとか、上流階級の付き合いかあって、大変なんじゃないの？ それに、嫁いびりもあったりして。掃除しても

『祐子さん、こちらがまだ汚れていてよ!』って、指で埃を取って言われたり」

「いつの時代の話だ！ そんないびりはないよ」

祐子のはんびり手を振るけれど、万が一そんなことがあった時には助けになりたいと意気込んだ。私は、祐子の手を握って力説する。

「よし、いじわるされたら私に言いなさい。バックが巨大すぎて、多分守ってはやれないけど、匿ってやる！ そうなったら、私と祐子で愛の逃避行だ!」

「やったあ」

祐子もノリノリで手を握り返してきた。

「やったあじゃないよ……」

康司さんは、手を取り合って誓う私たちの手を引き離して、祐子の手を握り込む。

「愛の逃避行なんて聞き捨てならないな。それに、どこかへ出かけるなら俺も行きたい」「え〜？ たまには夕夏と二人でも行きたい」

「じゃあ、逃避行って言われるとどこかへ消えちゃいそうで心配だから、普通の旅行でお願いします」

康司さんの慌てた様子に、岩泉さんが噴き出す。その後も、岩泉さんが康司さんを小突いては冗談を言っている。二人は気の置けない友人同士という感じで、見ているこちらにも楽しくなった。

私だけじゃなくて、テーブルにいるみんなが、この場を楽しいと思ってくれている。その雰囲気がとても嬉しくて、私は岩泉さんを見て微笑んだ。彼も同じようにこちらを見て笑ってくれた。

食事もデザートも食べ終わると、康司さんが軽く手を挙げた。

すると、さっと店員さんが来て、銀のトレーに載せられた小さな紙が康司さんの前に差し出される。

あっ……とあって、私は慌てて隣の岩泉さんの服の袖を引っ張った。そして「あの紙、取ってください」とお願いする。私の席からでは手を伸ばしても届かなそうだったので、康司さんの向かいに座る岩泉さんをお願いしたのだ。

彼はチラリと私を見てから、康司さんが確認しようとしていた紙をひよいと取り上げた。

「これ？」

「ありがとう」

私を見下ろして言う彼から、伝票を受け取った。

「ちょっと、夕夏、割り勘だからね」

私の行動を察知した祐子が、釘を刺してくる。

「ダメよ。今日はお祝いなんだから。懐事情により、景気よく全員分……と言えないところが情けないけど、せめて祐子の分は私が払う」

格好悪いけど、正直にそう話した。しかし祐子はなかなか首を縦に振らず、しばらくの間、押し問答することになってしまう。

そんなやり取りをしている間に、岩泉さんが財布から出したカードを銀のトレーに置いて、店員さんに渡していた。

私が驚いて目を見開きながら彼を見ると、視線が合った。

「ここは、全部俺に任せなさい」

くすくすと笑って、私を見ている。

だけど、その言葉に甘えるわけにはいかない。

「初対面の人にご馳走してもらうなんて、できません。そして、お祝いの気持ちなので
祐子の分は私が払いたいんです」

岩泉さんを見て私が首を横に振ると、彼は驚いた顔をした。

その横で、祐子が嘔き出す。

「夕夏がそう言うなら、奢ってもらおうかな。ご馳走様」

「うんっ」

さすがに、祐子たちの目の前でお金のやりとりをするのはマナーが悪いだろうと、二人を先に店から出るよう促し、あとからこっそり支払った。

会計も済み、店の出口へと向かって歩いて行く。祐子と康司さんが先に行っていたので、岩泉さんの腕をとんとんと叩いて声をかけた。

「すみません、私が言い出したばかりに」

「え？ なにが？」

彼は目をぱちくりさせて私を見下ろしている。

「支払いです……。私が祐子の分を払うと言い出したから、岩泉さんまで康司さんに食

事を奢らなきゃならなくなっちゃって」

本当だったら、言い出しっべの私が全員分払うのがスマートだ。男性同士は、お祝いの席とかで食事を奢ったりしないのかもしれない。

自分のせいで急な出費をさせてしまったかと思うと申し訳なかった。

すると、あまりにも情けない顔をしていたのか、岩泉さんが私の頭をぼんぼんと叩いて慰めてくれる。

「いや、そういうのにまったく気が回っていなかったから、却って助かったよ。田中さんはプレゼントも用意してたようだし、お財布が厳しくなるのは当然だ。祐子ちゃんが大変そうに持ってたあれ、君があげたんだろう？」

周りのことがよく見えている人だなあ。それに、私に気を使わせないように、さり気なくフォローしてくれて。

「はい。そう言ってもらえて助かります。実は、プレゼントも張り切りすぎて、予算オーバーしてて」

ほっと息を吐きながら言うのと、岩泉さんは楽しそうに笑う。その爽やかな笑顔を見たら、さらに心が軽くなった。

レストランの外に出ると、湿った空気が肌を撫でる。もしかしたら、店にいる間に少

し降ったのかもしれない。そう思いながら空を見上げていると――

「夕夏ちゃん、送っていくよ」

康司さんが車のキーをかざしながら言ってくれたけれど、丁重ていちょうにお断りした。

「そう？ 遠慮えんりょしなくてもいいのに。あ、そうだ。連絡先を教えてください。祐子が家出した時のために」

さっきお店で話していた、「愛の逃避行」のことを気にしているらしい。祐子にべた惚ほれな様子に心が温まり、思わず笑みがこぼれる。

「連絡先、いいですよ。でも、役には立たないと思いますよ」

祐子が家出するような事態になれば、私は全面的に彼女の味方だ。居場所を聞かれても、答えることなんてありえない。

言外げんがいに含めた意味を正確に捉とらえたようで、康司さんは苦笑いしている。

「それでも教えてほしい。誤解されて家出することも考えられるからね」

「なるほど。どっちにしても、私のスマホが鳴らないのが一番です」

バッグからスマホを取り出し、自分の電話番号を表示させながらにっこり笑った。

連絡先を交換した後は、祐子たちを駐車場まで送っていくことに。四人で連れ立って、康司さんの車のある場所まで行く。

「夕夏、いろいろありがとう！ またね！」

「またね！」

祐子たちの乗った車を見送って振り返ると、岩泉さんが待ち構えたように言った。

「送っていくよ」

康司さんと同じ言葉だ。

――過去の私だったら、自意識過剰にも「もしかしたら、私に好意があるのかな?」
と思ってしまうところだろう。

でも、腰に手を当てて立つイケメンに言われても、そんな勘違いはまったく起こさない。
ハイスベックでイケメンで、しかも友人の婚約者の友人という私にまで優しいなんて、
非の打ちどころがなさすぎる。

彼の気遣いが、なんだかくすぐったくて、私はくすぐすと笑った。

「ありがとうございます。でも、私の家、ここから近いので、一人でタクシーで帰れます」
彼に、そんな気は使わなくていいと伝えて、店の近くの道に停まっているタクシーへ
向かった。

「うん、じゃあ、タクシーに乗ろうか」

岩泉さんは、ニコニコして言う。

そうして、私が乗り込むより先にタクシーに近づき、運転手になにか話しかけた。

……うん？ 岩泉さんも一緒に乗るのだろうか。

ジェントルマンは、一度断られたくらいでは簡単に引かないようだ。女性は、言葉と行動が裏腹な時もあるし、真に受けて送らなくて、怒られた経験があるのかもしれない。でも私は、そんなつもりで言ったわけじゃないから安心してほしい。

「私は本当に一人で平気です。だからどうぞ、お気になさらず」

「うん、わかった」

今度はあっさりとは承諾してくれたのでホッとす。

開いたドアの横に手を置き、エスコートしてくれたのでそのまま乗り込んだ。

「もう少し、奥へ行ってくれる？」

「え？」

どういうこと？ さっき私が一人で帰ると言った時『わかった』と答えてくれたはずなのに。

「もう少しと呑みたいんだ。付き合ってくれない？」

「ええっと……」

ふわふわする頭で、どう返事をしようか考えている間に、車のシートと背中の中に手を差し入れられ、奥へ行くよう促された。

「あ、あの……」

もう少しと付き合うくらいは構わないのだが、私でいいのだろうか。最初は紹介と

いう形で会う約束になっていたから、気を使って誘ってくれているのではないだろうか。それは申し訳ない。

そんな複雑な思いが脳裏をよぎったけれど、酔った頭では考えがまとまらなくてアタフタしてしまう。すると、彼は私が帰りの心配をしていると思っただけ、安心させるように言った。

「ああ、ちゃんと最後は家に送ってあげるから」

「は、はい」

「うん」

ニコニコニコニコ。

岩泉さんは、とても楽しそうに笑っている。その笑顔を見たら、少なくとも彼が嫌々誘っているわけではないとわかった。

「ふふっ。もう一軒、行きましょう」

だから、嬉しいなあと思って私も笑った。

そうして着いたのは、喫茶店のような竹まいのワインバーだった。実際、昼間は喫茶店として営業しているらしい。店内のあちこちにワインの瓶が飾ってあって、可愛いお店だ。

——誘われるまま呑みにきちゃったけど、本当によかったのかな？
今さらながら、心配になってくる。

そんなことを考えているうちに、カウンター席に通された。岩泉さんと並んで席につく。「ええと、私は酔っているのでソフトドリンクがいいです」

本格的に酔っている。さっきだって、歩くたびにふわんふわんとしていた。

「そっか。無理強いはいしないけど、あと一杯くらい、サングリアとかどう？ ワインカクテル。おいしいよ？」

アルコールが入っていないものを頼もうとしたのだが、岩泉さんが示したカクテルがものすごくおいしそうで、あと一杯だけ呑むことにした。

「大丈夫。酔いつぶれたら、俺の家に連れて帰って、責任持って介抱するから」

そんな冗談もさらりと行ってしまふ彼に、私は免疫がないのだからやめてほしいと思う。

だけど、彼は私の事情なんて知るはずもない。必死で平静を装って返事をした。

「そうですか……」

いくら彼を意識していないとは言っても、こんな過激なことを言われて平気でいられるわけがない。なにせ私は、男性と付き合ったことなど一度もないのだ。それどころか、二人きりで呑みにきたのだって初である。

酔いとは別の熱さが頬に集まってきたけれど、気がつかないふりをしてメニューを見つめた。

「夕夏ちゃん、俺にも、連絡先教えてくれる？」

注文が終わった後で、岩泉さんがスマホを取り出しながら聞いてきた。

——ん？ 夕夏ちゃん？ さっきの食事会の時は『田中さん』と呼んでいなかったっけ。急に親しみを込めたような呼び方をされて、ちよつと動揺してしまふ。いくら意識するまでもない別世界の相手とはいえ、刺激が強すぎる。

とはいえ、連絡先を聞いたのは社交辞令だろう。私に恥をかかせないように、聞いてくれているに違いない。

「はあ、いいですけど。そんなに気を使ってくださなくて大丈夫ですよ？」

彼の手元を、ぼんやりと眺めながら答えた。

すると彼は、私が言う番号を登録して、一度電話をかけてきた。

その慣れた手つきから、彼にとつてはよくしていることなんだろうと思う。そして、女性に番号を聞いて断られたことなんてないんだろなあ、とも。

お互いに番号を登録し終わると、岩泉さんがテーブルに片肘をつけて、私を覗き込んでくる。

妙に距離が近くて、ぎよつとしていると——

「夕夏ちゃん？俺のこと、どう思う？」

唐突に、そんなことを聞いてきた。

なんだか、告白する前ふりのようなセリフだ。

というか、女の子に想いを伝えるよう促しているような、「好き」と返ってくるのが当然のような言い方に、少し呆れる。

私もたいがい自意識過剰だが、彼もなかなかの自信家である。とはいえ、これだけあらゆるものが整っているなら、自信家なのも頷ける話だ。

とにかく。彼がドキッとすることを言っても、今はそんな流れじゃない。なにせ相手は私。彼が好意を持つようなタイプの女じゃない。

——うん、大丈夫。口説かれているなんて勘違いしない。

「ハイスベックなイケメンさん」

「ぶはっ」

私が簡潔に答えると、思わずといった感じで噴き出された。

それから岩泉さんは、すごく楽しそうな表情で、内緒話をするように顔を耳元に近づけてくる。

「そのハイスベックなイケメンさんと付き合ってみない？」

——んんんん？

その時ちょうど、サンテリアが運ばれてきた。グラスの縁にカットオレンジを差してあって、とつてもお洒落だ。

気持ちを着けるためにグラスを手に取り、オレンジをばくと食べる。それから意を決して、口を開いた。

「んと、ですね」

「うん？」

岩泉さんは体ごと私のほうを向き、片肘をついて見つめてくる。

「私って、自意識過剰なところがあります」

相手の真意がわからずドキドキしながらしゃべるより、先に自己申告してしまおうと、口を開く。

きつと、岩泉さんはいろいろな女性と接したことがあるだろうし、変に格好をつけて空回るよりマシだと思った。

「へえ」

岩泉さんは、さして驚いた風もなく、そう言った。私を馬鹿にしたような様子のない、彼の優しさがありがたい。

「それですね、んと、今、もしかして口説かれてる……？」
「みたいに感じるんですが」
言いながら、やっぱり恥ずかしくて、声が小さくなっていく。

——もう、意識しないで、さらっと言えたらいいのに！

「ああ、口説いてるからね」

「そう、こんな風に、さらっと言えられたら。」

……？ あれ。

「そっかあ——口説いてる……っ？」

「そう。俺と付き合ってる？」

思考停止。

五秒。

十秒。

三十秒経過——

岩泉さんの顔を見たまま固まったら、彼がふっと笑った。それから、私の唇に付いていたオレンジの粒を指で拭われた——ところで正気に戻って……

「うえええつ、づええ!？」

大音量で奇声を発してしまっただけど、私は悪くないと思う。

岩泉さんは、私のあまりの声の大きさにびっくりした顔をしてから、にっこり笑った。その笑顔に、はっとして叫んだ。

「からかわないでください！ もう、もうっ……！ 私はそういうの、慣れてないんですっ」

慣れてないどころか、初めてだ。

男性から冗談でも告白まがいのことをされたことで、目に涙まで浮かんでくる。

「からかってないけど」

「けど、面白がっているとか言うんでしょ！ もう、もう、もおうつ」

恥ずかしさで頭が回らなくて、「もう」としか言葉が出てこない。

岩泉さんは私を見て、くすくす笑って言った。

「そういう姿が可愛いと思うんだ。いつも隣にいられたらいいなって」
するりと伸びてきた彼の手が、私の髪を一房すくひらき上げる。

たったそれだけの仕草に、私は固まって動けなくなりました。

——『可愛い』。

そんなこと、初めて言われた。ずっと一人で生きていくことを目標にしてきたけど、

やつぱり可愛いという言葉は嬉しくて。でも、どんな反応を返せばいいのかわからない。

「あの、あの……っ！」

パニックになって、意味なく手を振り回してしまう。彼は、そんな私を面白そうに眺めながら――

「うん、落ち着こうか」

ぼん、と私の頭を軽く叩き、顔を覗き込んできた。ち、近い！

「は、い……………」

切れ長の目が、優しく細められる。間近で見る彼も、やつぱり格好よくて、頭の中がぐしゃぐしゃになってしまう。しかも、うるたえてうるさくする私を、呆れもせずには微笑んで見守っていてくれる。

しばらくは俯いていたけれど、ちらりと視線を向けると、なにも言わずに彼は微笑む。そんな彼の姿に、じわじわと顔が熱くなってくる。

「ふふ。もつと真っ赤になった。可愛い」

耳を塞ぎたくなるような甘い声で、何度も私を可愛いと言う。

蕩けるようなセリフとともに置かれた、頭の上の大きな掌が気持ちいい。

恥ずかしくしていたたまれないのに、頭に手を置かれると妙に落ち着く。顔を覗き込まれて、優しい目で見つめられるたびに、不思議と緊張は解れていった。

私がじっと見つめても、目の前の岩泉さんは、依然として満面の笑みだ。

「ねえ、俺と付き合ってほしいと言っただけど、その返事を聞かせてもらえない？

まあ、今日会ったばかりだし、すぐには無理なら、これから考えてほしい」

――本気なの！

てつきり、イケメンさんのリップサービスかと思っただ！

どうして私なのか、こういう時はどう答えたらいいのか、いろんな疑問が頭の中を通り過ぎていく。またもアタフタし始めた私に、彼は言う。

「あ、オツケーなら、今すぐ返事してくれていいよ？」

オツケーなわけない。たった数分、二人でいるだけで心臓が破裂寸前なのに。

そうだ。よく聞くあのセリフでお茶を濁して……………！

「あ、おと……………」

……………もだちから……………

「まさか断る気じゃないよね？ それなら、もう少し俺を知ってから判断してほしい」

お友達から、と最後まで言わせてもらえなかった。

さすが百戦錬磨の――かどうかは知らないが――イケメン。ぬかりない。

「それと、お友達からとか、無理だから」

――あつれ〜？ そのフレーズって、告白をお断りする時の常套句なんじゃないのか

な？　こう言っておけば万事解決！　の古来より伝わる魔法の言葉じゃなかったっけ？
 「だって俺は、夕夏と手をつないで歩きたいし、抱き寄せてもみたい。キスしたりその後も……」

——突然なに言ってるんの、この人!?　いきなり紡がれる甘く過激な言葉に、私はぶるぶると首を横に振った。

っていうか、さり気なく『夕夏ちゃん』から呼び捨てに変わってるし！

なにせ私はお付き合い経験ゼロ。同年代の多くの女性が持っているであろうスルースキルも皆無だ。

あまりのことに、なにも言葉が出てこない。ぱっくんぱっくんと口を開け閉めしている間に、頭にあつた彼の手が、するりと頬に落ちてきた。そして親指で唇をたどられ、顎を捕まえられる。

「キス、してみたいい？」

「ダメです！」

瞬時に答えた。

今、顔に触れられているのだって、私にとっては初めての経験。この上、キスまでされたら、即気絶したっておかしくない。

岩泉さんは私の答えの早さに驚いた様子で目を丸くして、顎から思わずといったよう

に手を離し——大笑いした。

その後は、必要以上に接近したり過度のスキンシップをされることはなかった。

私がサンゲリアを呑み終えたところで店を出る。それからまた一緒にタクシーに乗って、私の家の前まで送ってくれた。

アパートの近くの大通り沿いで降りしてくれたら歩いて帰ると、固辞したけれど——
 「夕夏がどんなところに住んでるのか知りたい。……って言ったら、気持ち悪い？」

それまでの自信に満ち溢れた態度から一転、悲しそうな顔で覗き込まれて、思わず首を横に振った。

気持ち悪いってことはないけれど、遠回りすることになるから料金がかさむのが気になる、と言うと、彼はまた満面の笑みを浮かべる。

「そういうの気にするところも可愛い」

タクシーのメーターを気にすることの、どこが可愛いのかさっぱりだ。

……バーで告白まがいのことをされて以来、彼は私が恥ずかしがることしか言わなくなっていました。彼が私に本気なはずはないとわかっているのに、ドキドキが止まらない。

——結局、アパートの前まで送ると言って、彼は譲ってくれなかった。私は押し切られる形で承諾した。

アパートの前に着いてタクシーから降りようとしたら、車内に残った彼に手を引かれ

る。少し体が傾き、彼と顔が接近した。

「簡単に、家まで送らせたらダメだよ」

耳元でささやかれた——上に、ふっと、息を吹きかけられた。

思わず体が跳ね上がる。慌てて降りると、タクシーはすぐに発進した。岩泉さんはうしろを向き、手を振っている。大きな口を開けて笑いながら。

——お前が言うな——！

真つ赤な顔で、耳を押さえて立ち尽くした状態で、タクシーを見送った。

顔の赤みが引かないまま家に帰って、リビングの真ん中に座り込んでいる現在。

——私の勘違いでなければ、多分だけど、告白、されてしまった……

去り際に見た彼は、かなり笑っていた。やっぱり冗談だったのだろうか。男性に免疫のなさそうな私の反応が新鮮で、ちよつとからかってみただけとか……

うん、やっぱり冗談だ。また自意識過剰にも勘違いするところだった。

——彼は、私もしさつきお付き合いを受けると言ったらどうしたのだろうか。その場ですぐに「冗談だって」と否定した？ それとも、とりあえずお付き合いを始めるけれど、彼が飽きたらすぐに捨てられた……？ いずれにしても、申し出を受けたら傷付くことになりそう。

そう思うのに、彼の優しい笑顔や、低い声でささやかれた甘いセリフが蘇^{よみがえ}ってきて頭から離れない。さつきからずっと、思い出しては身悶^{みだた}える、というのを繰り返している。どうしたらいいんだろう？

格好いいのはもちろんだけど、私がメニューに悩んだり返答に困ったりした時のさりげない優しさに、胸がときめいてしまった。自分が彼の特別になったような気がして。

——自意識過剰と言われるのが怖くて、ずつとずつと封じ込めていた気持ち、自然と引き出されてしまった。とはいえ、この想いに身を任せて行動することはできない。

もしも彼に冷たく拒絶されたら、それこそ立ち直れなくなってしまうからだから。

——うん、やっぱり考えるのはやめよう。

私は、彼の笑顔を思い浮かべて強く首を横に振った。

彼に恋をしても無駄だし、向こうも私をからかっただけだ。

無理矢理自分を納得させようとしているのに、彼に触れられた髪や頬^ほが熱を持っていて、余計に意識してしまう。

ふいに、タクシーを降りる時の彼を思い出す。

——耳に息を吹きかけるとか！

あんなイタズラ、小学生の頃にされて以来なんですけど！ 大人もやるんですね！ いや、むしろ大人の高等恋愛テクニクですか!? 現に私は、体の芯^{しん}がゾクゾクする

ような変な感覚があつて、余計に意識しちゃってますから！

……
あああああ。

岩泉さんの恋愛観は、ハイレベルすぎてついていけません。

そんなことを考えながら、さらに一人で身悶みもたえ続けていた。

その時、スマホがメールの着信を伝える。

頭を切り替えるつもりで、すぐにメールチェックをした。

『今帰ったよ。ただいま。次はいつ会える？』

送り主は、もちろん岩泉さん。思いもかけないメールに、頭の中が沸騰して、私の許容量を超えた。

2

次の日から、岩泉さんの甘いメール攻撃が始まった。

本気かどうかは別としても、好意を向けてくれているのだから、「攻撃」という言葉はふさわしくないのかもしれない。しかし、私にとっては攻撃に他ならないのだ。

『食事会、楽しかったね』

『あの日はすごく可愛かった』

『また会いたい』

と、どこのドラマのセリフですか、と思うようなものが次々に送られてくる。

私は自分のことを自意識過剰だと思っているが、彼もたいがい自信過剰だ。

私だったら、こんなことを送って引かれなかな？ と気になって仕方ないだろう。

あの容姿と性格ならば、自信があつて当然かもしれないけれど、そういうのを恐れない心の強さを尊敬する。

だからと言って、彼の誘いに乗ることはできず、『ごめんなさい』と送った。しかし、それで引き下がる彼ではない。

『忙しいみたいだね。いつなら会える？』

と、すぐさま返事がくる。

——昨日も一昨日も、夜九時過ぎにメールがきた。

現在の時刻は八時。この三日の経験から、私は少し……少しだけ、メールがくるのを期待していた。

毎回『ありがとうございます』とか『ごめんなさい』とか工夫のない返事しかできないくせに、自分勝手なのはわかっている。

連日届く甘いメールを見るたびに、彼は本当に私を可愛いと思ってくれているのかもしれないと、期待しそうになっている自分がいる。

——だけど、もし。もしも私とその気になって応じたら……

『え、本気にしてたの？ 俺が君相手に真剣交際しようと思うとでも？ っただけ自分に自信があるんだよ』

そんなことを言われる自分が、容易に想像できる。

誰かを好きになって、その想いを表現するのが怖い。

もし彼に冷たく突き放されたら、真に受けてその気になったことが恥はずかしくて、自己嫌悪こけんおで、もう人前こけんおに出ることさえできなくなってしまうかもしれない。

リビングで座り、そんなことをグルグルと考えていた私は、もう一度、時間を見る。さつきから、まだ五分も経っていない。

ため息を吐いて、自分はどれだけ彼からの連絡を楽しみにしているのかと自嘲気味じちやうに笑った時だった。

ルルルル……ルルルル……

スマホが着信を知らせる。この音は、メールじゃなくて電話だ。

ということはお目当ての連絡ではないと、がっかりしながら確認したら——
画面に表示されていた名前は、「岩泉さん」。

「えっ、なんで!？」

思わず声を出してスマホを持ち上げた。

「は、はいっ……!？」

『もしもし？ こんばんは』

「こっ………こんばんは。田中、です」

わかつてるよと言われそうだと思いつつながら名乗ったところ、彼はくすくすと笑いながら『岩泉です』と言った。

『声が聞きたくて。今、大丈夫？』

初しよっ端ぱなから甘く気障きざなことを言われて、私は固まる。

声が聞きたいって、そんなにさらりと言えてしまうのですか!？」

「きよっ、今日は早めに仕事が終わったから、もう家で……」

慌てふためいて返答をする。

ドキドキと胸が高鳴って、スマホを握にぎる自分の手に力が入った。

岩泉さんは、『本当は昨日も一昨日おとといも電話したかったけど、遅くまで休日出勤してたからかけなかった』と言う。

「お仕事、お疲れ様です」

そんなありきたりな言葉しかかけられない、自分の語彙ごいの少なさに落ち込む。けれど、

そんな私の返答を気にする様子もなく、彼は『ありがとう』と電話口で笑っているようだった。

『できるなら、毎日でも電話して声を聞きたいけど、夜遅くにかけるのは迷惑だと思って』いや、時間の問題じゃない。いちいち甘すぎるセリフをささやかれることに困っているんだけどっ！

「毎日なんて……絶対に無理です!!」

そんなことされたら、心臓が破裂する。

『ふーん……じゃあ、毎日じゃなきゃ、いいってこと?』

「いえ、その、あう……」

電話しながら、ふと部屋の隅に置かれているドレッサーの鏡が目に入った。両手でスマホを握って必死で耳に押し当てている私が映っている。顔は真っ赤だ。

ますますいたたまれなくなり、うまく言葉を紡げなくなっていく。

そんな私の様子を察知しているらしい彼は、終始笑いながらも、しどろもどろで話す私を優しく待ってくれた。

『——また電話する』

「はい。おやすみなさい」

そう言って、電話は切れた。

時計を見ると、八時十五分。十分ほどの短い時間の会話。

だけど、私は彼の声の聞こえている間中ドキドキして、緊張して、胸がキューツとなるような感覚を味わっていた。

ほすとクツションに顔を埋め、独り言をつぶやく。

「毎日は、死ぬ……」



翌日から、私の希望通り、毎日の電話は免れた。ただし、まったくないというわけではなく、二、三日に一度は電話があり、それ以外の日はメールがくる。私の要望を聞き入れつつも、連絡は欠かさない。マメな人だなあと思う。

ここ二週間ほどは、そんなペースで連絡を取っていた。

そんなに何度も電話で話していれば、さすがに少しは慣れる。今日かかってきた電話で、すでに五回目だ。

『それで、取引先の相手の名前間違えてさ——』

ちょうど今は、仕事でのドジな失敗談を聞かせてくれていた。私はそれを、クスクスと笑いながら聞いている。

岩泉さんは営業さんらしく、話題が豊富だ。彼の話はいつも面白くて、自然と自分からリラックスできているのを感じる。

「岩泉さんでもそんな失敗するんですね。祐子も、康司さんが——」
 そう言った時、突然彼が『あ！』と大きな声を上げた。

「どうしたんですか？」

「康司のことは名前呼びなのに、俺のことはなんで隼って呼んでくれないの？」

「……なにを言い出すかと思えば。」

「祐子が同じ名字になるからですよ……」

二人とも岸谷さんだ。名前呼びになるのは仕方がない。

『なんで。ズルいだろ!? 俺も隼って呼ばれたい。それに、敬語もやめてほしい』

『む、無理です』

こうやって電話をしていることに慣れたのも、自分的には快挙だと思おう。なのに、さらに名前呼びとタメ口だなんて。

その返答が、彼は気に入らなかったようで——

『だったら、康司のことも岸谷さんって呼んで。康司に嫉妬するから』

と、拗ねたように言われた。

その口調がなんだか可愛くて、私は思わず子供を宥めるような気持ちになって了承し

てしまった。

「ふふっ。わかりました。……えと、隼、さんの希望に沿えるように、頑張……」

……やっぱ無理！

言っている途中で恥ずかしさが湧き上がってきて、前言撤回しようとしたら——

『可愛いいい！』

嬉しそうな叫び声が聞こえてくる。私は羞恥に耐えられなくなり、「おやすみなさいっ」と言っただけで電話を切った。

3

夕夏との電話を切った俺——岩泉隼は、座っていたベッドへと仰向けに倒れた。

「ああ、うまくいかねえ」

つい、そんな言葉が口をつく。

康司の結婚を祝う食事会で初めて会ってから二週間。毎日欠かさず連絡し、必死で口説いているのに、まったく手応えがない。ハッキリ言って、こんなことは生まれて初めての経験。もっとも、最初の頃に比べれば、大分距離が縮まったと思うが。

立ち読みサンプル はここまで